



TITLE:

# <大會抄録>アブル・ファズルの皇帝観について

AUTHOR(S):

近藤, 治

---

CITATION:

近藤, 治. <大會抄録>アブル・ファズルの皇帝観について. 東洋史研究  
1999, 58(3): 615-615

ISSUE DATE:

1999-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155255>

RIGHT:

形の寫本全體としては、寫本執筆時點（おそらく一九世紀）に現存したホージャを中心とするグループにより、特定の政治的活動に關連して作成された可能性が考えられる。

要するに、本寫本はそのタズキラ部分と全體という二側面から、一八〜一九世紀におけるカーシユガル・ホージャ家の活動の特徴的な斷面を直接的に反映するものであらう。

## アブル・ファズルの皇帝觀について

近 藤 治

ムガル朝第三代皇帝アクバルの時代に、帝國の體制が整備される。皇帝權の確立を中心としたこの體制の最大のイデオログは、歴史家のアブル・ファズル（一五五一—一六〇二）であった。彼の描く皇帝觀はいかなるものであったのだろうか。主著の一つ『アクバル會典』に主として據りながら、見ていくことにしよう。

アブル・ファズルによれば、皇帝は何よりもまず「普遍的和解」(sulh-i kull)の推進者である。神の代理者であるべき皇帝によってのみ、さまざまな宗教信者の統一、協調を意味する「普遍的和解」は實現可能である。このような皇帝は、寛容さを具えた「完全人間」(insan-i kamil)でもある。

第二に、皇帝は最高度の宗教的權威を有する者とされる。一五七九年のマフザル（宣言）の發表以來、アクバルはイスラム界におい

てムジュタヒド（立法行爲者）を凌駕した存在と目されたが、さらに、多宗派が並存する現實を踏まえて、太陽崇拜と結合した一種の皇帝崇拜が發達した。第三に、皇帝は帝國の體現者とされた。皇帝の權威の強化はムガル帝國の強化を意味し、皇帝權への背任はムガル帝國への挑戦に他ならない。そのために、皇帝權の強化に資するさまざまな儀式や措置が考案される。

アクバルは、まさにアブル・ファズルが描く理想的な皇帝觀になった、近世的獨裁君主であった。

## 宋代政治史料解析法試論

——時政記、日記史料を手掛かりとして——

平 田 茂 樹

現在、宋代政治史研究は、李燾『續資治通鑑長編』、李心傳『建炎以來繫年要錄』等の史料を用いて研究が進められている。しかし、これらの史料を用いる際、その材料となった各種史料の特質、編纂過程は十分留意されていない。例えば、『續資治通鑑長編』は實錄・國史、『建炎以來繫年要錄』は日曆・會要といった敕撰史料を主に、私史・隨筆・行狀、墓誌等の私撰史料を副次的史料として編纂されているが、これら日曆・實錄・國史等の史料それ自體の性格を考慮した解析法の構築がなされてこなかった。

さて、宋代の政治史研究の主たる材料となる敕撰史料の編纂過程の概要を述べれば次の通りとなる。起居注、時政記をもとに日曆